かわいいキティー

ジョージ・A・バーミンガム
八幡　雅彦・訳

彼女はまさにその呼び名にふさわしかった。アイルランド中に住むどのキティーよりも彼女はその呼び名にふさわしかった。馬丁のひとり、ビリー・レイリーは彼女を庭から馬小屋へと戻した。彼女の幸運な持ち主、ボブ・チャルマーズ大尉は満足そうに含み笑いをした。彼女の調教師、ベリュー氏は喜んでいる猫のようにのどを鳴らした。

「わしは有り金すべてキティーにつぎ込んだ」とチャルマーズ大尉。

ベリュー氏も同様だった。ビリー・レイリーも、他の全ての馬丁たちも同様だった。チャルマーズ大尉、ベリュー氏、ビリー・レイリーそして全ての馬丁たちと多少なりとも関係のある全ての人物たちの親戚、友人までもが全財産をキティーに賭けていた。

「今度のレースでキティーに勝てる馬はおらん」とチャルマーズ大尉。

「間違いなくキティーが勝ちますとも」とベリュー氏。

もしかわいいキティーに勝てる馬が他にいないとすれば、論理的必然性としてかわいいキティーが勝つ。翌日のバリガノンの金賞競馬に勝つということになる。チャルマーズ大尉はその日の夜、幸福に満ちて床に就いた。ベリュー氏も同様だった。どの馬もかわいいキティーを打ち負かすことができない。ゆえに・・・。

しかしその推論は間違っていた。どの馬もかわいいキティーには勝てないというだけの理由で、彼女が金賞競馬に勝てるということにはならなかった。翌朝6時、ベリュー氏はそのことを知った。7時半、彼は、5キロ近く郊外の道を走って歩いて、息を切らしてその絶望的な知らせをチャルマーズ大尉に届けた。「かわいいキティーは金賞競馬で負けることはありません。しかし勝つこともありません。というのは、実は、金賞競馬は中止になったからです」

皆様方も御存じの通り、今では当然どなたも御存じだと思うのですが、アイルランドでは私たちは独立共和国を打ち立てたいと願っております。私たちはこの目的達成のためには可能なあらゆる手段を尽くします。そして道路を封鎖すること以上に有効な手段はないと私たちは確信しております。もちろん私たち自身の道路をです。なぜならアイルランドの道路は他の国の道路とは接していないからです。

私たちが道路をすべて封鎖することに成功すれば、共和国はすぐにでも打ち立てられる一般に考えられています。橋があるところではどこでも橋を爆破することができます。もし橋がなければ大きな木を切り倒して道路をふさぐことができます。もし橋も木もなければ、その時には深い穴を掘って溝を作ることができます。これは木を切り倒したり、橋を爆破したりするのと同じように、交通を止めるにはきわめて有効な手段です。

レースの前の夜、アイルランド共和国軍の一派がバリガノンを行進した。町で唯一の橋は爆破され、2本の大木が切り倒され、8つの溝が道路に掘られた。その結果、バリガノン自体が、もっと重大なことには競馬場が完全に他の世界から遮断されたのである。

チャルマーズ大尉は、この知らせを聞いた時、まだベッドの中にいた。彼は身を起こし、10分近く滔々と罵りの言葉を吐き続けた。彼は共和制を、王制を、国会を、憲法制定議会を、シン・フェインを、警察を、ありとあらゆる兵士たちを同じようにボロクソに罵った。それから彼は起き上がって着替えた。

「ベリュー、急げ。アイルランド中の労働者をかき集めろ。いくら払ってもかまわないから、12時までにはいくつかでも溝を埋めさせるのだ。まだ4時間たっぷりある。それだけの時間があれば何本かの道路を通れるようにすることは可能なはずだ」

「それは不可能でございます」

「可能に決まっている」

「不可能でございます。 アイルランド中どこを捜しても私どものために働いてくれる者はおりません。シン・フェインの活動を邪魔する者は誰でも後で撃ち殺されるからでございます。とにかくアイルランド人はそう信じております。そして、いくら金を積まれようとも命の危険を冒す者はおりません」

チャルマーズ大尉はもう一度罵りの言葉を吐いた。

「打つ手はひとつしかない。 あのキチガイどもの指導者たちに電報を打って、溝を埋める許可をもらうのだ。あの連中はアホだが、競馬を中止にするほどのアホではないはずだ」

ベリュー氏は、チャルマーズ大尉が指しているのはシン・フェインの幹部たちのことだと悟った。しかし、かの紳士たちに電報を打つのは思っているほど容易ではございません。アイルランド共和国政府、大尉が言われるところの「キチガイどもの指導者たち」は、幹部役員の住所を公表することをはばかっております。と申しますのも暴君イギリスは、共和国派の指導者たちを捕らえたら牢獄に入れるというおぞましい習慣を持っているからでございます。ベリュー氏はそのように語った。

「あの連中に近づく方法は絶対何かある。この一帯を取り仕切っているボスは誰だ」

「存じません。しかしビリー・レイリーがあの連中に深入りしているともっぱらの噂でございます」

「よし、レイリーを使おう」

ビリー・レイリーは彼の全財産をかわいいキティーにつぎ込んだばかりか、チャルマーズ大尉のメイドとして働いているモリー・ドノヴァンをも説得して、彼女が持っている最後の１ペニーまで、それどころか彼女の下着１枚残らずその馬につぎ込ませていたのである。チャルマーズ大尉とベリュー氏がビリー・レイリーに会って話した時、彼はガックリ落ち込み、惨めそのものだった。

「何かの間違いです」とビリー・レイリー。

「忌々しい、とんでもない間違いだ」とチャルマーズ大尉。

ビリー・レイリーはこれほど忌々しい最悪の間違いはないと認めた。

「ならばすぐに正した方がよい。そして、それができるのはおまえだけなのだ、レイリー。おまえの司令官か、共和国の大統領か、それともこの騒ぎを引き起こしている連中のところに行って・・・」

「俺がですか。冗談でしょう。俺はどちらの側とも係わりは持っていません。 俺は、どちら側にしろ、政治に首を突っ込むような人間じゃありません。ベリューさんもそのことは知ってるはずです」

「私がおまえについて知っているのは」とベリュー氏。「おまえがシン・フェインの一味に深入りしているという噂だ。そして今おまえがブタバコにぶち込まれていないのは幸運以外の何のおかげでもないということだ」

「そして私がおまえについて知っていることは」とチャルマーズ大尉。「もしかわいいキティーが今日勝てなければ、モリー・ドノヴァンがおまえに対してきちがいのように怒り狂うということだ。おまえから賭けを誘われたとモリー自身が言っていた。もしレースが行われなければ、一体どうやってかわいいキティーが勝てる。ほら、５シリングやるからおまえのボスに十分長い電報を打て」

ビリー・レイリーはその金を拒んで脇に置いた。

「電報など打つ必要はありません。 ベリューさんが、俺が１時間だけここを離れることを許してくれるんだったら・・・」

「なんなら２時間でもいいぞ」とベリュー氏「しかし時間を無駄にするな。一刻を争っているのだからな」

ビリー・レイリーは、交渉の役割を担って、駈け出して行った。チャルマーズ大尉とベリュー氏はかわいいキティーの衝立の戸にもたれかかって、レイリーの帰りを待った。30分経つか経たないかのうちに彼は戻って来た。

「望むのなら４つの溝を埋めてもかまわないとのことです」とビリー・レイリー。

「十分だ」とチャルマーズ大尉。「競馬場に行く道がひとつだけあれば満足だ。行くぞ、ベリュー」

「ちょっとお待ちください。 俺はまだメッセージの半分しか伝えていません。レースが終わってもう溝を一度掘り返すのだったら、溝を４つ埋めてもかまわないとのことです」

「喜んでその通りしてやる」とチャルマーズ大尉。「今日競馬場に行くことさえできたら、

来年の今日まで道路が通れなくなっても私はいっこうにかまわん」

ベリュー氏は大尉の腕をつかんで、中庭の、ビリー・レイリーの耳が届かない片隅に連れて行った。

「今夜、もう一度溝を掘り返すなど絶対不可能です。ここかしこ警官だらけです。もし道路の溝を掘り返しているのを連中に発見でもされたら、即刻逮捕されますぞ」

「すっかり警官どものことを忘れていた。ひとつの国の中にふたつの対立する政府があるというのは、なんと厄介なことか。道路が使えるか使えないか、連中の間で決めてくれれば一番スッキリするのだが。しかし私はあきらめない。溝を埋める作業にできるだけ多くの人間を雇ってくれ。私は警察に行って話をつけて来る」

ベリュー氏はビリー・レイリーのところへ戻って行った。

「ビリー、シャベルを持って私と一緒に来い。たぶんおまえは溝を掘るのを手伝ったのだろうから、もう一度石で溝を埋めてもかまわんだろう」

「俺は溝を掘る手伝いなどしていません。俺がそんな馬鹿だと思ってるのですか」

ビリー・レイリーも、他の熱心な政治家たちも馬鹿以外の何者でもないとベリュー氏は思っていた。彼はそのことをはっきり口に出して言った。

自分がそこまで馬鹿でないことを示すために、レイリーはシャベルを抱えた他の6人の若者を集めた。彼らにもう4人加わり、さらに別の5人が加わった。11時までには、付近一帯の体の頑丈な若者たちは総出で道路の修復のために働いていた。そして労働組合運動が始まって以来、アイルランドで働いてきた誰よりも彼らは一生懸命働いた。正午にはバリガノン競馬場に至るほとんどの道路が通行可能になったばかりか、見事な平らに整備された。

チャルマーズ大尉は、年老いた猟馬にまたがって郊外を抜け警部補のオフィスまで行った。ちょうどブラック警部補が、部下から送られてきた前の日の夜の破壊行為に関する報告を読んでいるところだった。

「おかげで」とブラック警部補。「今日のスポーツは全て中止だ。この分だとバリガノン競馬も中止だな」

「とんでもございません。警部補殿が中止を命じない限りは行われます」とチャルマーズ大尉。

「ワシは中止を命じたりはせん。アイルランド中どこを探してもワシほどバリガノン競馬を望んでいる者はおらん。ワシは君の馬にちょっとした金を賭けておる。今日レースさえ行われたら、君の馬が勝つと思っておる」

「警部補殿がうまく動いてさえくだされば、まちがいなく勝ちます」

「君はいったいワシに何をして欲しいと言うのかね」

「この金賞競馬が終わったら、あなたの部下たちにただちに帰るよう命じていただきたいのです。そして一晩中警察署の中にいるよう命じていただきたいのです。今、2、30人の男たちが溝を埋めておりまして・・・」

「その男どもは後で撃ち殺されるぞ」

「その心配はございません。私はシン・フェインの連中から、夜になったらまた掘り返すという条件で、溝を埋める許可を得ました。」

「なんだと！ワシは君のやることを黙って見ておくわけにはいかん。やめさせる必要がある。バリガノンの道路に溝が掘られようがどうしようが、ワシはそんなことどうでもよい。ワシはその道路を一切使わないのだから」

「しかし、警部補殿、かわいいキティーが勝てるか勝てないかは一大事ではございませんか。もしレースが行われなければ勝てません。もし溝を埋めなければレースは中止になります」

「かわいいキティーが実際に勝つとワシは思っておる」

「間違いなく勝ちますとも」とチャルマーズ。「そしてもし警部補殿がもう少しお気を強くされたいのでしたら、私と賭けをいたしませんか。私はかわいいキティーの負けに賭けます。お安い賭けだとお思いになりませんか。必ず私が負けることになりましょうから」

「ありがとう。しかし賄賂はもう結構だ。すでに余るほど金はある」

チャルマーズはそれ以上一言も喋らずにオフィスを後にした。彼は、ブラック警部補ほどの地位にある人物に実際の約束を強要する

のはふさわしくないと感じた。

レースは、多くの、陽気な群衆の前で行われた。かわいいキティーは大差で勝った。馬券業者以外は誰もが喜んだ。ブラック警部補は大金を手に入れ、彼の部下の警官たちも皆いくばくかの金を手にした。レースが終わり、最後の一台の車が視界から姿を消した時、ビリー・レイリーは彼の労働者たちを再び集め、溝を掘り返す作業に取り掛かった。ブラック警部補は、尊敬すべき人物にふさわしく、帰路に就いた。彼の部下の警官たちは、密かに出された命令に背いて、警察署には戻らなかった。彼らはシャベルを借りて溝を掘り返す作業に加わった。

しかしビリー・レイリーは一貫した主義主張の男だった。彼は、労働組合員が非組合員たちと一緒に働くことを拒むように、警官たちと一緒に作業することを拒んだ。警官たちが現れた時、彼は仲間たちに作業の中止を命じた。警官たちは、その日レースが行われてかわいいキティーが勝ったことが本当に嬉しくて、朝のうちに埋められていた溝を掘り返した。ビリー・レイリーと彼の仲間たちは、アイルランド共和国への奉仕という点では警官たちに負けてはならじと、作業に取りかかり、道路の少し向こうに４つの溝を新たに掘った。

誰もが疲れ、勝利に浸って家路に就いた。大成功の１日だった。そしてバリガノンの住民たちを除いては誰ひとり苦しむことはなかった。住民たちは次の３週間、牧草地以外からは町に出入りすることができなかった。

しかしバリガノンは小さな、取るに足らぬ町で、そこに住む人々に何が起ころうと誰もかまわなかったのである。

[解説]

これはジョージ・A・バーミンガム（George A. Birmingham, 1865-1950）の短編小説 集 *A Public Scandal* (1922) のうちに収められた１篇、"Pretty Kitty" の翻訳である。

バーミンガムは、北アイルランドの首都ベルファーストのプロテスタントの家庭に生まれた。本名はジェイムズ・オウエン・ハネィ (James Owen Hannay) である。

ダブリン大学トリニティー校の神学部に進み、父親同様、聖職者になった。しかし、父親と違ったのは、父親はイギリスに忠誠を誓う熱心なユニオニストであったのに対し、バーミンガムはナショナリズムに共鳴し、ゲーリック・リーグにも加入し、アイルランドのイギリスからの独立を主張した。『煮えたぎる鍋』(*The Seething Pot*, 1905)、『ハイヤシンス』(*Hyacinth*, 1906) といった初期の政治小説では、青年主人公たちがアイルランド独立のために戦って挫折する姿を描いた。これらの作品はナショナリスト、カトリックの誤解を招き、バーミンガムは 1906 年のゲーリック・リーグの幹部会議で糾弾され、やがてはナショナリズムと袂を分かち、ナショナリズム、ユニオニズムどちらにも与することなく、ユーモア小説を通して両派の融和を訴えるようになる。

バーミンガムは1918年から22年まで南のアイルランド・キルデア州のカーナルウェイで教区司祭を務めた。カーナルウェイはダブリンから約 50 キロ南西部へ行った、通常アイルランド地図にも出てこない、小さな田舎町である。バーミンガムは自叙伝『麗しき土地』(*Pleasant Places*, 1934) の中でこの町について次のように述べている。

「カーナルウェイと、事実上キルデア州のその近隣一帯は馬に熱狂していた。誰もが狩猟と競馬に関心を持っていた・・・カーナルウェイからさほど遠くないところで行われる年に一度のパンチェスタウン競馬の時にはすべての学校が休みになった。あらゆる仕事がストップし、地区一斉清掃が行われた。庭は手入れされ、壊れた窓は修理され、門と柵にはペンキが塗られた。私がある日、日曜学校の子供たちに、イエス・キリスト様が馬に乗ってイェルサレムにお入りになったしゅろの主日(Palm Sunday)、なぜ人々は道に枝をまいたのか」と尋ねた。しばらく考えたのち、ある少年が『はい、それは馬に速く走ることを教えるためでした』と答えた」(p.242)

人々が競馬に熱中する姿はこの短編小説の中にも描かれている。パンチェスタウン(Punchestown)は、アイルランドで最大級の競馬が行われる競馬場である。パンチェスタウン・フェスティバルと名打って、毎年４月の最後の火曜から土曜まで５日間レースが行

われており、1861年には初日だけで約15万人の観客を動員したと言われている。この作品に出てくるバリガノン(Ballygannon)のモデルとなった町である。

この作品が書かれた当時、アイルランドは全島がイギリスの植民地支配下にあり、1916年のイースター蜂起以降、激しい独立戦争を繰り広げていた。特にこの作品に出てくるシン・フェインの党員たちがイースター蜂起では中心になって戦い、アイルランド共和国宣言を行った。そしてシン・フェインの過激なテロリズム活動はバーミンガム一家が住むカーナルウェイにも及んできた。バーミンガムはそのことを『麗しき土地』の中で次のように述べている。

「シン・フェイン党のテロリズム政策が国全土に及んできた。暴力が暴力を呼んだ。殺人のニュースが、時には私たちの友人たちの殺害のニュースが常に私たちの耳に届いた。郵便局が襲撃され、小さなオフィスは全て閉鎖され、郵便為替を買うためには、あるいは電報を打つためには私たちは12キロ先まで行かなければならなかった。道路は溝が掘られ、木が倒され通行不可能になった。車の運転は、たとえわずかな距離でも警察の許可を得ることが必要になり、可能な場所でも困難を極めた。自家用車は盗まれ、壊され、時には焼かれた。厳しい手紙の検閲があった。それは、いわゆる『政府』(その呼び方は失笑を買った)ではなく、どの郵便局にもスパイを置いているシン・フェインによって行われた。この国の状況を説明するためにイギリスの友人たちにあわてて手紙を書こうものなら、すぐにアイルランドを出て行った方が良いぞというを受け取った。個人の家庭の中で話されることも同じ結果を伴った。ほとんどの召使がスパイで、家主の会話を密告していたのである」(p.246)

この短編小説の中では、チャルマーズ大尉とブラック警部補がイギリス派、ビリー・レイリーがアイルランド派として描かれている。そしてベリューはアイルランド派と臭わせる描かれ方である。しかし、当時の実際の雰囲気と大きく違うのは、この作品には「ユーモア」が満ち溢れていることである。

バーミンガムは、アイルランドとイギリスの確執、カトリック・ナショナリストとプロテスタント・ユニオニストの対立を目の当たりにしてきた。そして深いキリスト教信仰心を持った彼は、アイルランドを平和なより良い国にするにはどうしたらよいのかと真剣に模索した。ゲーリック・リーグに加入してナショナリズムを訴えた。アイルランド統一を目指して戦い挫折する青年たちを描いた政治小説を出版した。しかし彼の善意はカトリック・ナショナリスト、プロテスタント・ユニオニスト双方から誤解を招き、嫌悪された。これらの経験からバーミンガムが悟ったのは、「人間同士が仲良くやってゆくためには何事においてもユーモアの精神が必要」ということであった。実生活においては数々の苦難を経験したからこそ、そして信仰心の深い聖職者であったからこそ、彼の小説は、人間同士の融和に対する真摯な願望と、それを実現させるためのユーモアの必要性を、強い説得力を持って訴えている。この短編小説「かわいいキティー」はそのことを端的に表現している。

(写真は、バーミンガムが礼拝を行っていたカーナルウェイのSt. Patrick's Church)